

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成20年10月29日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科 行動文化学専攻

職名・学年 博士後期課程2年

氏 名 浅尾 仁彦

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	5th International Conference of Construction Grammar (ICCG-5)		
発表題目	Productivity of Compounds: an application of construction morphology.		
開催場所	アメリカ合衆国・テキサス大学オースティン校		
渡航期間	平成20年9月25日 ~ 平成20年9月30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要 / 報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 □ 無		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	学会参加費	10,098 円
		航空券	75,100 円
国内空港使用料		2,040 円	
海外空港諸税・燃油サーチャージ		46,560 円	
	宿泊・滞在諸経費・移動交通費	70,000 円	

成果の概要 / 浅尾仁彦

申請者は、貴財団の助成を受け、9月26～28日にテキサス大学オースティン校（アメリカ合衆国テキサス州オースティン）にて開催された第5回国際構文文法学会（The 5th International Conference on Construction Grammar: ICCG-5）に参加し、"Productivity of Compounds: An Application of Construction Morphology" と題した研究発表を行った。ここで発表の概要と、学会に参加することで得られた情報等について報告する。

この研究発表では、日本語複合語を題材として、その生産的なパターンを記述する一般的方法についての研究報告を行った。従来、接辞生産性に対しては既に提案された指標があるが、これは複合語をはじめとするより一般の対象にはそのままでは適用することができない。また、二重メカニズムモデルに基づいて、複合語を規則的語形成によるものと語彙的語形成によるものとに二分する方法は、複合語の生産的なパターンを記述するうえでは不十分である。本発表ではこのような先行研究に見られる複合語生産性に関する混乱について指摘し、代案として、各複合語が形態論的な構文 (morphological construction) の実現例であると考えることにより、複合語に見られる生産的なパターンについて適切な記述が得られることを示した。さらに、構文の生産性を実際の頻度分布に基づいて計算するためのシミュレーションモデルを提案し、新聞コーパスにおける複合語（複合動詞・動詞由来複合語）の頻度情報に基づいて実際にシミュレーションを行った結果を報告した。このモデルによって、先行研究において主に内省に基づいて記述された生産性が、自動的に再現されることを示した。

構文文法が形態論においても有効であることは多くの構文文法学者によって想定されていたが、形態論コミュニティで構文文法が正面切って扱われることは稀であった。構文形態論 (Construction Morphology) はオランダの形態論学者 Geert Booij によって比較的最近になって提唱された枠組みであり、構文文法の有用性を初めて形態論分野において提示した。本研究はおそらく初めての非ヨーロッパ言語への構文形態論の応用となり、また初めて大規模な言語データを用いて実証的なサポートを与えた研究となった。このことは、構文文法の裾野を広げることに寄与するとともに、形態論コミュニティにとっても新たな理論

的視点をもたらすインパクトをもつ。

発表では多くの有意義な質問・コメントを得ることができた。特に、今回提示したシミュレーションモデルに対し、品詞やその下位範疇、さらに意味素性などを取り入れてより汎用性の高いモデルに改良していく方向性について複数のコメントを頂いた。現在、この点を考慮して、品詞をはじめとする任意の素性を組み込むことのできる新たなモデルを構築し、ひきつづきシミュレーションを行っている。この成果は 2009 年 3 月に別の国内学会で報告する予定である。

そのほか、学会では他の研究者の研究報告を多く聴講することができた。特に、今回の学会は構文文法の中でも Sign-Based Construction Grammar (SBCG) と呼ばれる、主辞駆動句構造文法 (HPSG) など単一化文法やコンピュータ言語学との親和性が高い枠組みを取り上げた招待講演が多く、構文文法においてもより実証性や応用可能性を重んじる傾向が高まっていることを実感した。しかしながら、その記述の方法論については研究者の内省に基づいた古典的方法が未だ主流を占めている。頻度情報 / 確率情報の組み込みは、コンピュータによる実装を実用的なものにするうえで欠かすことのできない要素であるが、そのような定量的側面との融合をどのように図るかなどについてはまだ注目されていないようであった。この点で、複合語に記述対象を限定しているとはいえ、構文の生産性について具体的な数値を与えることに成功した申請者の研究が新たに提供できる視点の意義は大きいと感じた。日本国内ではあまり知られていない SBCG の成果を把握するため、今後勉強会を開催することを計画している。

また、国内外に新たな知己を得、議論を行う良い機会となった。